

棄老説話（難題型）の源流

田畑 博子

一、はじめに

「姥棄て山」については江戸時代より様々な論考がある。^①三原幸久は「わが国では、『今昔物語集』巻五第三十二話に「七十余人流遺他国国語」として『雑宝蔵経』巻一「棄老国縁」に由来する物語を載せているが、同様の物語は『打聞集』第七話「老耆移他国事」にもあり、『雑談集』巻四には簡単な引用がある」としている[稲田 一九七七 一〇一～一〇二]。また花部英雄は「インドの教典『雑宝蔵経』にも同じモチーフのものがみえる。」とし、棄老説話・難題型の起源を『雑宝蔵経』としている[稲田 一九九九 一七六]。柳田国男も「村と学童」の中でそれを指摘し、通例となっていた「柳田 一九四五」。しかしこのような中、稲田浩二は「アヒカル物語」と「棄老説話」との関連についてを指摘し「稲田 二〇〇一 三五～三八」、関敬吾も『日本の昔話―比較研究序説―』に「アヒ

カル」について触れている[関 一九七七 一六九～一七二]。このように比較文学研究者の間では棄老説話・難題型の起源を「アヒカル物語」としている。例えば遠田勝「イソップ伝」の伝承と変容―「アヒカル物語」から「伊曾保物語」まで―[一九八三]を初めとして、井本英一「棄老説話の起源[一九九六]」、岩男久仁子「イソップ」伝の「難題問答」[一九九六]では、日本の棄老説話の原初を古代オリエントに伝承されていたアヒカル物語に求めている。なぜここに二つの説が並び存しているか、双方の説を比較して検討してみたい。^②そこで本稿では、この「アヒカル物語」と日本に伝承されている棄老説話とが、どのように関連するのか難題と話型について検証する。そのために日本の棄老説話を遡行し、文献、口承説話を比較し、それぞれの難題をもとに伝承経路を探っていくたい。

二、古代オリエント・古代中国等文献にみる棄老説話

二一「アヒカル物語」（紀元前五世紀成立）

「アヒカル物語」は、古代オリエントに伝承されていた物語で、主人公アヒカルは、賢明な書記官であった。このアヒカルについてのは「アヒカル物語群」といえるほど広く分布していたようで、「イソップ」、「旧約聖書」の外典の一つである「トビト記」にも出てくる。この「アヒカル物語」の最古のテキストは、エジプト・ナイル川の中にあるエレパンティネ島で、肥料を探していた農民によって発見された。この文書の内容については一九〇六年にイギリスのセイストとカウリーにより、一九一一年にはベルリン大学の中近東語学者エドゥワルト・ザハウによって研究発表された〔杉 一九七八 三七七～三八六〕。これらはアラム語で書かれていたが、アラム語はシリアとメソポタミアで紀元前からいくつもの小国家を築いたアラム人の言語で、前七～前四世紀にはアッシリア王国、新バビロニア王国、ペルシア帝国の公用語として広大な地域で用いられていた。イエス・キリストも使っていたとされ、旧約聖書にも一部使用されている。また成立については紀元前五世紀後半とされる〔伊藤 一九七四 二二三〕。「アヒカル物語」の要旨は次のようである。

アッシリアの賢明な書記官アヒカルは六十人の妻と六十の邸宅を持ち六十歳になったが、息子に恵まれなかつたので、甥のナダンに息子代わりに育てた。ナダンは財産を浪費し、あらゆ

る罪を犯したため、アヒカルの追及を恐れた。そこでナダンは王に「アヒカルが王に対して叛逆の心を持っている」と訴えた。すると王はアヒカルに死刑を宣告する。しかし死刑執行人に自分の代わりに奴隷を処刑させ、妻にかくまってもらう。このアヒカルの死の知らせが届くと隣国エジプトの王はすぐに「天と地の間に宮殿を建てるように」との難題をアッシリアに出してきた。これができなかつたら国家収入を三年間支払ってもらい、できたときは反対にエジプトがアッシリアに支払うというものであった。王はアヒカルを処刑したことを後悔したが、後の祭りだった。しかしその時、死刑執行人はアヒカルが生きていることを王に知らせ、王はアヒカルをエジプトに向かわせた。アヒカルは大きな鳥の背中に乗って空中に飛び上がり、地上にいるエジプトの王様に、「石材を空中に運び上げるように頼んだ」〔伊藤 一九七四 二四四～二五六〕。

この「アヒカル物語」に棄老説話の源流をみるのが、前述の比較文学研究者である。古代オリエントと古代日本を結ぶ文化に関する研究をしている井本は、日本の棄老説話の起源は、「アヒカル物語」とし、そこから「イソップ」、「ジャータカ物語」、「雑宝蔵経」、「日本口承説話」へとという伝播経路をたどったと説明している。そこでは主に中東の文献を中心に論じ、エジプトで発見されたパピルスの断片に記録されていた「アヒカル物語」と、当時広く伝承していた賢者アヒカルの物語群を「イソップ」の中から拾い出し、日本の棄老説話と比較研究している。また難

題についても論及しており、「ジャータカ物語」の中にある多くの難題の中から、三つの難題が日本の難題型説話の難題に影響を与えているとしている〔井本 一九九六 七七～一〇〇〕。

二一2 『イソップ寓話』（紀元前三世紀ごろの成立）

『イソップ寓話』の中の「棄老説話」とされる話は次のようである。

バビロニアの宰相になったイソップは、養子の奸計に陥れられて王から死刑を宣告される。イソップの味方であった將軍は古い棺桶にイソップを入れて、国王には処刑したと偽る。するとそれを知ったエジプトの王は、バビロニア王に対して十年の貢納を賭けて難題を吹きかけてきた。その難題は「地にも着かず、天にも触れない高い塔をつくる者たちをよこせ」というものだった。王はイソップを殺してしまったことを後悔する。この時イソップが生きていることを知らされ、すぐにイソップはエジプトへ行く。鶯の背中に子どもを乗せ、敷地の四隅で鶯を舞い上がらせ、子どもたちに「泥と煉瓦と材木と、それに道具を渡して下さい」と叫ばせた〔中務 一九九六 七四～七五〕。

二一3 『南伝本生譚』（ジャータカ物語）（紀元前三世紀ごろの成立）

紀元前三世紀ごろの成立とされるインドの『南伝本生譚』（ジャータカ物語）は次のようである（以下『ジャータカ物語』とする）。〔大トシネル前生物語〕

印度のマホーサダは、ヴィーデーハ王を敵王の城内からトンネルを掘って脱出させなければならなくなる。そのとき出された難題を比類なき最高の賢者マホーサダが解いて助ける。七歳の賢者であるマホーサダは、王の命による十九の難題をことごとく解決していく〔中村 一九八八 一～一四八〕。

二一4 『雑宝蔵経』棄老説話國縁第四（紀元前二〇〇年ごろの成立）

『雑宝蔵経』はインドの原始仏教経典で、新国訳大藏教本部にある。内容は次のようである。

棄老国の王によって親を棄てる命が出される。ある大臣は親を棄てることができず、かくまっている。ある時天神より王に難題が出されるが、誰も答えられない。その時、かくまっていた親が答えを教え、王はそれより老人の知恵を認識し、それ以来、棄てることはしなくなった。〔『雑宝蔵経』巻第一書写年代 天平十二年（七四〇年） 阪本龍門文庫善本電子画像集・奈良女子大学所蔵 資料画像集画像原文 データベース・『國訳一切経・本縁部』岡教遠訳 一九三一（昭和六年）大東出版社 トロント大学収蔵 画像原文データベース〕

三、難題の比較

それぞれの話の難題を見てみたい。（なお答えが日本と共通の場合には記載しない）

①「アヒカル物語」

難題 「天と地の間に宮殿を建てるように」↓国家収入を三年

間賭ける。

解答……大きな鳥の背中に乗って空中に飛び上がり、地上にいるエ

ジプトの王様に、石材を空中に運び上げるように頼んだ。

②「イソップ」

難題 「地にも着かず、天にも触れない高い塔をつくる者たち

をよこせ」↓十年の貢納を賭ける。

解答……鶯の背中に子どもを乗せ、敷地の四隅で鶯を舞い上が

らせ、子どもたちに「泥と煉瓦と材木と、それに道具を渡して下さい」と叫ばせた。

③『ジャータカ物語』の難題

難題 (8) 棒問答……アカシアの棒の根と上の区別。

難題 (10) 蛇問答……蛇の雌雄の判別。

解答……①雄の方が尾が太い ②雄の蛇の頭は大きい ③雄の

蛇の両眼が大きい ④雄の爪紋は丸みを帯びているが、

雌は切れている。

難題 (12) マニ珠問答……八角形のマニ珠を貫く糸が切れた

が、だれも新しい糸を通すことができなかった。

難題 (15) 砂問答……砂の綱を作るようにと王様のお達しが

あった。

解答……村人は見たことがないので断片を送るようにと王様に

頼む。

難題 (17) 庭園問答……庭園を持つてくるようにと王様から

のお達しがあった。

解答……村人は、持つていくので、持たせてくださいといって

解決した。

ここで雑宝教棄老説話の難題と共通するのは(8)棒問答

(10)蛇問答(12)マニ珠問答である。(15)の砂問答は日本の

灰繩と類似している。また(17)は「アヒカル物語」と「イソップ寓話」に共通する。

④『雑宝藏経』

難題 1 「蛇の雌雄の判別」

解答……柔らかい布の上に置いて騒ぎ立てるのは雄、じつとし

て動かないのは雌である。

難題 3 「象の重さを量るにはどうしたらよいか」

解答……象を池に浮かぶ船に乗せ、どのくらい沈んだかを見て、

次に石を乗せて同じ位置に沈ませてその石の重さを量ればわかる。

難題 8 「真檀木の幹と根元の判別はどうするか」

難題 9 「馬の親子の判別方法」

九問出された難題のうち、1、3、8、9の難題が日本に伝承さ

れている棄老説話に登場する。

⑤中国口承説話の難題「劉二〇〇二六一六〜六二六」

I 鼠を排除する方法 II 水源を探す方法 III 怪物を殺す方法 IV

蛇の雌雄の判別 V 馬の親子の判別 VI 木の根と梢の判別 VII 九曲

の明珠を繋ぐ方法 Ⅷ二匹の鼠の判別 IX二つの虫の判別 X一本の棒の判別 XI旱災の時、水を探す方法

⑥その他の国の伝承

1 ラオス 「老いを憎んだ王様」難題型……木の梢と元の見極

め「キャシー・スパニョーリ二〇〇一 四六〜五一」

2 ネパール 「老父を棄てるドコ」(背負子)……親棄畜型「坂

田 一九九八 六二

⑦韓国の口承説話

韓国の伝承を見ると、親棄畜型が多く伝承されているが、難題型も伝承されている。次に述べるのは『韓国の民話伝説「崔常植 二〇〇八」』『韓国口碑文学大系 全羅北道全州市・完州郡篇「崔来沃 二〇〇二」』『全北民譚「崔来沃 一九七九」』『韓国古典説話集1「朴チョンイク 二〇〇〇」』にある棄老説話についての分類である。

(一) 枝折型+蟻通+木の梢と根元の判別+馬の親子の判別

(二) 象の体重を量る+鳥の母と子の判別+木の末と元の判別

(三) 枝折型+灰縄型

(四) 馬の親子の判別+蟻通+象の重さを量る

(五) 「救国」パターン(中国から全土をおおう布を要求される)

これから韓国では蟻通、木の梢と根元の判別、馬の親子の判別、鳥の母と子の判別、灰縄三尋、象の重さを量るといった難題が見られ、枝折型と難題の複合型が広く伝承されていることがわかる。

三―1 難題のまとめ

「アヒカル物語」「イソップ」双方は、難題も切り返しも同様である。また『南伝本生譚(ジャータカ)』の「比類なき七歳の最高の賢者マホーサダ」による難題の解決策は、次のようである。十九問あるうちで、日本の口承説話にモチーフが共通するものを挙げる。

(8) (10) (12) の三問は、井本英一が日本の口承説話との関連について指摘しているが、(15) 砂の網については論及していない。これは日本の灰縄と類似している。「砂の網を作るようにと王様のお達しがあったが、村人が見たことがないので断片を送るように王様に頼む」という話である。日本の灰縄型では絢つた縄を焼くという解決策を講じるが、ここでは難題に対して「村人は見たことがないので断片を送るようにと王様に頼む」という難題を重ねる手法が取られている。

『雑宝蔵経』

(1) 蛇の雌雄の判別 (3) 象の重さを量る (8) 木の幹と根元の判別 (9) 馬の親子の判別 の四つの難題が日本口承説話に登場する。しかしここには「蟻通」は見られない。『雑宝蔵経』が棄老説話の起源とするなら、蟻通型はどこからきたのであろうか。「南伝本生譚(ジャータカ)」に蟻通型の難題があるので、別系統の伝播があったと考えたい。

このように難題を見ていくと、「ジャータカ物語」にあつて

「雑宝蔵経」にないものは、蟻通、灰繩であり、「雑宝蔵経」にあつて「ジャータカ物語」にないものは象の重さを量ると馬の親子の判別である。日本では蟻通、灰繩は非常に伝承密度の濃い話である。するとこれらのモチーフは「雑宝蔵経」を経ない別の伝承形態があつたのではないかと考えられる。

次に中国を見ていくと、鼠退治型の話型が多く、灰繩型、象の体重を量る話はない。「象の体重を量る話」がない理由は、陳寿の著した『三国志』魏書卷二十「鄧哀王冲伝」にある曹操の息子、曹冲の話であることに理由がある。しかしこの話は象の重さを量ることが主題なので、インドなどに伝承していたモチーフが『三国志』に入ってきたと考えられる。

韓国と日本は難題の種類に類似点が多い。灰繩型は日本、韓国に多い。また日本、韓国では馬の親子の判別、蛇の雌雄の判別の話は伝承が少ない。そして柳田が指摘した日本独自の話とする「打たぬ太鼓に鳴る太鼓」という難題は、和尚と小僧の形式を取ることが多く、絵姿女房の難題にもなっている。文献としては『今昔物語』卷三二第三三の「竹取翁、見付女兒養語」に、この鼓を持つてくるようにという話が見られる。

四、老人遺棄の慣習について

老人遺棄の慣習と「棄老説話」との関連について関敬吾は「姥棄山考」で、六十歳の還暦、老人の欠歯、風葬と両墓性を

あげ、「姥棄山」の伝説が生まれる背景となる慣習が存在していたことを指摘している[関 一九六六 一七七]。

韓国の高麗葬⁽³⁾についての記録は『朝鮮王朝実録』の「二四二九 朝鮮王朝実録世宗十一年」にある。そこには死にかけた父母を、まだ息があるにもかかわらず外に放り出すようすが書かれている。そして「たとえまた生き返ることがあつても死を免れることはできない」とも書かれている。

この高麗葬は、斎藤忠などの朝鮮の再葬、洗骨葬研究によつて、東アジア地域で行われていた古代葬法であつたということがわかつている[斉藤 一九八一 二五五―二五七]。葬法については、朝鮮王朝前期に教化政策が行われている[古田 一九九二 九三―一四四]。

韓国における口承の棄老説話は「伝説の朝鮮」三輪環一九一九』に早く報告されている。その後『朝鮮童話集』朝鮮総督府 一九二四』が一九二六年に出されている。いずれの話も親棄養型の話である。

大島建彦は「姥捨て」と葬送について、「日本民俗学の立場からは、姥捨ての昔話や伝説が、厄年や隠居や葬送など、さまざまな習俗の反映としてとらえられている」としている。また「をばすて」は墓所にあたるという説が認められているとし、また五来重の『熊野詣』の「補陀落渡海」の項目には「おはつせ」または「はつせ」が大和の「隠国の初瀬」と同じ死者の国の風葬であり、棄老伝説は宝積経や大和物語に見える印度の

棄老説話の翻案である」と書かれていると指摘し、「葬制」との関連を論じている〔大島 一二八―一五六〕。

奄美・沖縄の葬送習俗として風葬や洗骨は、奄美・沖縄の人々にとっては記憶に新しい習俗である。洗骨は一九九〇年代まで、ときどき新聞紙上をにぎわす程度に行われていた。風葬は現在でも地元の人々はその場所を知っているし、人骨はそのままになっている〔渡邊 二〇〇八 四四七〕。

『古事記』、『日本書紀』では殯、『万葉集』では大殯とされる「殯（もがり）」の存在や、かつて日本のあちこちに存在した「喪屋」によって人々は、死を意識したのではないかと思われる。

一方視点を變えて葬送習俗を見てみると、平安時代末期・藤原頼長の日記『台記』にある「清目」に注目したい。そこには次のような描写がある。

死人妻女、被棄死人之清目貞正従者、賜檢非違使、被問穢実否、其問注記如此、宣計申穢有無者、披見之処、申曰、依非私宅、為不令穢其所、未死之時、語清目令置郭外畢清目申曰、未死之時、妻申可置郭外之由、答曰氣未絶忽棄置如何、妻申曰、依非私家不能令穢若不可忽死時、造小屋於郭外、早可置郭外隨命置郭外暫守之間、其氣絶畢仍所率棄也、貞正従者申曰、清目率死人過大路之時見之、成於郭内氣絶之疑計也

『増補史料大成』第二十四卷 一九八九〔台記 卷十一 久壽元年四月二日 一一六〕

承仕の妻曰く「私宅でない寄宿所をもし穢すようなことに

なつてはいけな思いましたので、まだ死ぬ前に、清目に申しつけて、郭外に出させたわけでございます」

清目曰く「私は、まだ死んでいないものを郭外に棄て置くのはいかなものでしょうか、と申し上げたのですが、奥様が、もし寄宿所を穢すようなことになつてはいけないうぐ死ななくとも、郭外に小屋をつくつて、とにかく早く運び出しました。その後、まもなく息絶えてしまいましたので、死体を運び棄てました次第です」

目撃者曰く「私は、清目が死体を引いて大路を過ぎていくのを見まして、郭内で死んだものとはかり思つたのです」

京都部落史研究所による『中世の民衆と芸能』には次のように説明されている〔京都部落史研究所 一九八六 七一―七六〕。

・「清目」とは「死体をかたづけけることを職業とする」人々のことである。

・『今昔物語』卷三一―三十にも、死にさうになつた女が家を追い出されて鳥辺野で死に絶えるという話があるが、人々は「死の穢れ」を怖れていたと考えられる。

・『兵範記』には死体を片づけける人を「河原法師等」と表記されている。

・『今物語』には「一条河原のきよめが家」とある。

これらとは異なり、貴族や寺社の葬儀を生活の糧にしていたのが「坂」（清水坂非人）である。文安二（一四四五）年に、東寺の寺僧の葬送に関して取り決めが結ばれたが、その内容は次

のようであった。「京都部落史研究所 一九八六 七一―七六」。

・坂は葬儀の際、遺体を載せる三味輿を東寺が反復して使用することを認める。

・火葬場に持ち込まれた幕や馬鞍といった道具類をすべて「坂の沙汰所」へ引き渡す。

などといったものであった。ここで注目したいのが、「輿の反復使用」である。火葬場に持ち込まれた品物はすべて坂非人が取得するのは当然と見なされていたので、輿だけは勘弁をということで、反復の使用を認めさせている。この輿の反復使用と「棄老説話」の「親棄舂型」との関連性が考えられる。一般庶民の葬送については『餓鬼草紙』に見られるようにさまざまな葬制がある。遺体は木棺に入れられたり、筵にのせられたりしている。ここは死人の衣服や道具類を得るために、生活の手段を持たない人々にとって重要な糧を得る場所であった。

五、まとめ

日本に伝承された棄老説話は、中国、韓国で採集されている話数と比較すると、その採集数そのものの多さと、バリエーションの多さに圧倒される。

話型から棄老説話を見ると、「アヒカル物語」、「イソップ寓話」、「雑宝蔵経」の話型と日本の口承説話の形式が一致する。難題は「ジャータカ物語」の難題の四つと一致する。また難題

を出すのは殿様、王様、外国、隣国となっている。また韓国の場合は中国となっている。この外国、隣国という対外意識はもとこの説話の持っていた話の要素で、名残と考えられる。

柳田国男は「親棄山」で灰縄型、枝折型を日本本来のものとしているが、灰縄型、枝折型は日本だけに伝承されているものではなく、韓国にも伝承されている。また『南伝本生譚（ジャータカ）』の難問「砂の綱」が「灰の綱」であるとするとするならば、インドにもその命脈はつながることとなる。

「親棄舂型」の初発は『孝子伝』にあるとされる。『雑宝蔵経』と棄老説話の関係については、이관복(イクアンボク)の『雑宝蔵経』の中の民間説話関連様相研究⁴⁾に詳しい。「이관복(イクアンボク)二〇一一 一四九―一七八」。

韓国の場合「枝折型」は母親が枝を折る場合が多いようだが、日本では母親とは限らない。採集数の多い長野・山口県の例を見ると、母親である場合が二十話、父親である場合が六話、老人である場合(不明)一話、また木の枝ではなく葉をちぎるというのが父親、母親それぞれ一話ずつある。日本全域をみてもほぼ同じ傾向にある。

中田李美子は、「枝折型」を「親棄舂型」の変型と見ている。また今野達は了誉の『古今序注』の枝折型説話、真名本『曾我物語』の同型の話について、外来の孝孫原谷系説話の二転三転した形としている「今野 二〇〇八 四八五」。この枝折型のモチーフは『神道集』巻二第七話「二所権現事」にもある。天

竺の斯羅奈国の姫は父親が都へ上がっているときに、継母から大きな穴に捨てられようとするが、松の木を削り落としながら行ったため、助かるという話である。中田李美子は「枝折りという概念がすでに歌学の世界に存在していたと思う」、「道しるべとして枝折りをするというのは和歌の世界の中で一般的だったのであろう」と述べているが、「枝折り」は山で作業をする人々が日常行う行為である。また『大和物語』の甥が叔母を棄てる話は、派生と考えるより、むしろ「アヒカル物語」の系譜からみると、実子でない点で主流である。

中国の棄老説話は「斗鼠記」として鼠を排除する話になっているが、日本では同型の話は伝承されていない。

難題型の棄老説話について、古代オリエントに伝承されていた「アヒカル物語」が各地に伝播したものであると考える。この話はイソップの中にもあり、その後各地に次第に伝承されていった。棄老説話は、古代オリエントから中央アジアを経て中国、朝鮮・韓国を通り日本までたどり着いた。老人の知恵で難題を解き、難局を乗り切るという骨格を持った話の一群が、古代オリエントの地に伝承されており、それらが姿を変えながら、はるか日本の地まで伝播した経緯がうかがえる。比較口承説話の文学研究の成果を取り入れ、今後研究を進めていく事が重要ではないだろうか。

《注》

(1) 契沖は『河社』で、稲垣龍軒は『東湖隨筆』で『雜宝藏経』

との関連を指摘している。柳田国男も「村と学童」で古代インドの仏教経典『雜宝藏経』にあると指摘している。

(2) 双方並立した理由として「一国民俗学」を提唱した柳田国男との関連を考えたい。柳田の「一国民俗学」を考えると、どうしても飛躍できなかつた。その連絡をもつとした方がよいと考える。

(3) 高麗葬という語は韓国では「姥捨山」と同じ使い方をする。

(4) 이관복(イクアンボク)は「孝の美德」として中韓棄老説話の比較をしている。東アジア地域に伝承されている棄老説話は仏教説話からの影響が大であるとし、各国に漸移していったと論じている。

《参考文献》

- 이관복(イクアンボク) 『잡보장경』 과중한 민간이야기 관련
양상연(二) 『雜宝藏経』 と中韩民間説話関連様相研究 『対
角思想』 如來十六号 二〇一一 図書出版(韓国)
飯倉照平編 『南方熊楠・高木敏雄往復書簡』 『熊楠研究』 五
二〇〇三 南方熊楠資料研究
池田亀鑑、岸上楨二、秋山虔編 『枕草子 紫式部日記』 一九五八
岩波書店
伊藤義教 『古代ベルシヤ』 一九七四 岩波書店
稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久 『日本昔話
事典』 一九七七 弘文堂

- 稲田浩二・稲田和子『日本昔話ハンドブック』二〇〇一 三省堂
 稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観』一九八五―一九九八 同
 朋舎
 井本英一「棄老説話の起源」『国際文化論集(十四)』一九九六
 桃山学院大学
 岩男久仁子「イソップ」伝の「難題問答」『国際文化論集
 三十九』二〇〇九 桃山学院大学
 A・モスタールト『オールドス口碑集』一九九六 磯野富士子訳
 平凡社
 岡教達訳『國訳一切経・本縁部』一九三一 大東出版社 トロ
 ント大学収蔵
 王燕生・周祖生『中国民間故事類型』一九九九 商務印刷館(中国)
 大木桃子「母の祈り―枝折型姥捨伝説の歌に関する考察―」
 『語文研究』八十五 一九九八 九州大学
 大島建彦「姥捨の伝承(含姥捨伝承一覽)」『日本文学文化』
 二〇〇一 東洋大学日本文学文化学会
 大島建彦『日本の昔話と伝説』二〇〇四 三弥井書店
 大谷義博「姥捨山伝説考」『季刊民族学研究』(二) 一九六二
 日本文化人類学会
 金久正『奄美に生きる日本古代文化』一九六三 刀江書院
 金容儀「棄老説話」の比較研究『日本研究』二十五卷
 二〇〇八 中央大学校(韓国)
 木村正中編『土佐日記・貫之集』一九八八 新潮社
 キヤシー・スパニョーリ『アジアの民話』北島義信・高垣友海
 訳 二〇〇一 同時代社
 京都部落史研究所『中世の民衆と芸能』一九八六 阿吽社
 工藤茂「姥捨の系譜」二〇〇五 おうふう
 小峯和明編『今昔物語集』二一九九九 岩波書店
 『孝子伝』陽明文庫本 『孝子伝』陽明文庫蔵・船橋本 『孝
 子伝』京都大学附属図書館蔵
 今野達「日本靈異記(吉志火麻呂) 説話演変によせて」『今野
 達説話文学論集』二〇〇八 勉誠社(『国語国文』五十五卷
 十一号一九八六 京都大学文学部国語学国文学研究室編)
 斎藤忠「東アジア葬・墓制の研究」一九八七 第一書房
 阪倉篤義、大津有一、築島裕、阿部俊子、今井源衛編『竹取物
 語伊勢物語大和物語』一九五七 岩波書店
 坂田貞二『インド・ネパール・スリランカの民話』一九九八
 みくに出版
 簞国松「孫家香故事集」一九九八 長江文芸出版社(中国)
 杉勇・三笠宮崇仁『古代オリエント集』筑摩世界文学大系1
 一九七八 筑摩書房
 『雑玉蔵経』書写年代 天平十二年(七四〇年) 阪本龍門文庫
 善本電子画像集(奈良女子大学所蔵資料画像集)
 関敬吾「昔話と笑話」一九六六 岩崎美術社
 関敬吾「日本の昔話―比較研究序説―」一九七七 日本放送出
 版協会
 増補「史料大成」刊行会『増補史料大成』第24卷 一九八九
 臨川書店

孫晋泰『朝鮮民譚集』一九三〇 郷土研究社

崔来沃『全北民譚』一九七九 螢雪出版社(韓国)

崔来沃『韓国口碑文学大系』二〇〇二 全羅北道全州市・完州郡篇 韓国精神文化研究院(韓国)

崔常植『韓国の民話伝説』二〇〇八 金順姫訳 東方出版

『朝鮮王朝実録』東京大学総合図書館蔵・朝鮮王朝実録画像データベース(『朝鮮王朝実録』は日本と韓国に分散している)

『朝鮮王朝実録』国史編纂委員会(韓国)ソウル大学 奎章閣 データベース

『朝鮮童話集』一九二四 朝鮮総督府

丁乃通『中国民間故事類型索引』鄭建成等訳一九八六 中国民間文芸出版社(中国)

遠田晤良「更級日記における姨捨」一九七九 札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学部紀要十五

遠田勝「イソップ伝」の伝承と変容―「アヒカル物語」から「伊曾保物語」まで』『比較文学研究四十四』一九八三 東大比較文学會編

俊頼髓脳研究会編『俊頼髓脳』一九九九 和泉書院

中田李美子「わが国における棄老説話の演変」『国語国文学会誌』第三十一号 一九八八 学習院大学

中務哲郎「イソップ」寓話の世界』一九九六 筑摩書房

中村元『ジャータカ全集』10 一九八八 春秋社

中村亮平『朝鮮童話集』一九二六 富山房

朴チヨンイク『韓国古典説話集』二〇〇〇 民俗苑(韓国)

白庚勝『中国民間故事全書』二〇〇五―二〇一二 知識産権出版

版社(中国)

裴永鎮『金徳順故事集』一九八五 上海文芸社(中国)

花部英雄「姥捨山私考」『昔話伝説研究』六 一九七七 昔話伝説研究会

福田アジオ他『日本民俗大辞典』上 一九九九 吉川弘文館

藤沢衛彦「棄老養老譚」『日本棄老説話文献考』『日本伝説研究』2 一九三五 三笠書房

藤田宏達・中村元『ジャータカ全集』二〇〇八 春秋社

古田博司「朝鮮王朝前期葬喪礼教化政策」『史学』第六二卷第一二二号 一九九二 三田史学会

南方熊楠『南方熊楠全集』八 書簡Ⅱ 一九七二 平凡社

三輪環「伝説の朝鮮」一九一九 博文館

柳田国男「村と学童」『柳田国男全集』十四 初版一九四五 筑摩書房

柳田国男『定本柳田国男集』第二十一卷 一九六二 筑摩書房

柳田国男「比較民俗学の問題」『定本柳田国男集』第三十卷 一九六四 筑摩書房

劉守華『中国民間故事類型研究』二〇〇二 華中師範大学出版社(中国)

渡邊欣雄・岡野宣勝『沖繩民俗辞典』二〇〇八 吉川弘文館(たばた・ひろこ/熊本大学大学院)